

五. 枯草の中で

肩で息をしながら圭介は枯草の上に腰を下ろした。後ろから小走りについてきたトレパン姿の武藤陽子はその横に座った。クリクリとした目で圭介を見上げて陽子が何か言うと圭介は乱れた息の中から笑顔を見せた。

「あたしたち一等だったわよ」

「ああ、・・・・」

グラウンドの中央を肩を組んで片足を紐で結び合った男女が走っていた。圭介たちがたった今走ってきた二人三脚競争がまだ続いている。

その朝も工事屋たちはいつもの時刻に入場した。休日だったがバスは特別に運行された。ハウスの方へ歩きながら表通りを左へ折れる時、グラウンドに張られたテントが見えた。未だ人影はなかった。

ハウスの前に落ちている木片を川村が蹴った。木片は勢いよく草むらの方へと転がっていく。木片のあった所は地面が乾いている。圭介はようやく朝露に気付き、あらためて周囲を見回した。

ハウスの屋根が濡れている。ハウスの横にころがっている、巨大な糸巻きを連想させる木製のケーブルドラムにも水が滲んでいる。新しい枯草の上にも露は降りているのだろうが、その明るい麦藁色が快く乾いた感じを与えている。

右の頬に朝陽を受けて圭介はグラウンドを囲んでいる枯草の中へ踏み込んでいった。葉の陰に隠れていた露の玉はたちまち砕けてカーキ色のズボンの裾に吸い込まれる。足首にしみてくる冷たさを感じながら、圭介はテントの方へと進んでいった。テントの前に立ち、朝陽を背にした圭介の影が湿ったグラウンドに長く引いていた。正面から光を浴びて雑木林は相変わらず梢を小さく揺すっていた。

圭介がいる時に工場が完全に止まったのは初めてのことだった。ブロワーやポンプの響きとトランスの唸り、そしてくぐもって聞こえてくる工場の運転音。これらは昼も夜も消えることがなく、工場に入ってくる者の耳をいつも震わせた。従業員たちの耳も工事屋たちの耳もこの音を基本波形として受け入れているため、これが意識の上で明瞭になることはほとんどない。基本波形が無くなった中に立って、圭介は初めてその重みを意識した。

心の中から何かが蒸発して消えていくような寂しさが圭介を襲ってきていた。空間に充ちている光の量が時とともに増してくるという実感だけが、その寂しさに歯止めをかけているようだった。

ハウスに戻って圭介は、前日食堂の売店で買った新しい運動靴に履き替えた。工事現場にトレバンなんか持ってきているわけがない。圭介の服装は通勤時に着ている作業服のままだ。休日に仕事をする気安さからか、川村も高瀬もなかなか着替えず、通勤着のまま新聞を読んでいる。高瀬は圭介と同じように作業服を通勤着にしている。

お湯が沸き、川村がコーヒーを入れる。工事屋たちは思い思いにそれをすすする。或る者は立ったまま、或る者は座って目を閉じて、また或る者は新聞を読みながらコーヒーカップに唇を当てる。日常が時をやや後ろへずらして流れ始めている。いつも響いている基本波形が無いことが工事屋たちの始動を遅らせているのかもしれない。

出入り口の所へ行って外に向かって大きな伸びをした川村の目に、表通りをグラウンドへ向かう従業員たちの姿が映った。間もなくグラウンドの方から聞こえてくる声に圭介が立ち上がった。

「そろそろ行ったほうがいいな……」

ハウスを出て行く圭介の後ろ姿を見て、工事屋たちもようやくエンジンがかかり始めた。彼らはグラウンドの方を気にしながら、裏通りに面した工場の入り口に姿を消した。

高木が若い女の子と肩を組んで走っていた。高木の勢いに引きずられるようにして女の子は付いていった。この日の高木は、目尻にしわを寄せて皮肉な笑いを口元に浮かべたいつもの高木ではなかった。走っている高木は普段見せたことのない真面目な表情をしていた。そして、応援席で観戦する高木の上機嫌な顔も、圭介にとっては初めて見る顔であった。大声で声援を送る高木など、今まで想像することもできなかった。

工場長は温和な顔を崩しっ放しであった。幅が広く短い身体を揺すり、顔を紅潮させて走る工場長の姿は微笑ましくさえ見えた。そんな中で秋山だけが浮いて見えるのが圭介の気にかかった。薄い唇の間からわずかに歯をのぞかせた秋山だけがいつもの表情を保っていた。競技に熱することもなく、応援に身を入れることもない秋山の周辺だけに、醒めたスポットライトの光が投げられているようであった。

走り終えた高木が圭介の後ろを通りながら声をかけた。

「真藤さん、カワイコちゃんとこんな所に座っていていいのかい。帰ったらみんなに突き上げられるぞ……」

圭介は振り返ってニヤッと笑った。

「今日は代表ですからね。みんなが私に『行って来い』言うたんですよ……」

「役得ですな、彼女を独り占めにするのも……」

圭介と目が合うと、陽子は上目づかいで肩をすくめてみせた。

電話の呼び出しなどでしばしば工事現場に現れる庶務係の女の子が武藤陽子だった。庶務係には男性が少ないからという理由で、圭介はもう一人の外来者である土建屋の若い技師と共に庶務チームに編入された。圭介がグラウンドに出て来るとすぐに陽子が近づいて来てそれを伝えた。

「真藤さん、私たちのチームよ。頑張りましょうね」

「はあ、あ、そうですか……よろしくお願いします」

「今日はそんなに堅苦しくしないでね。仕事じゃないんだもの。真藤さんはわたしと二人三脚を組むことにしちゃった」

陽子の目がいたずらっぽく動いて圭介を見つめた。その視線の中で圭介は面映い感情にとらわれ、思わず辺りを見まわした。この娘は何を考えているんだろう。圭介は戸惑っていた。

走ったり、応援したりしているうちに圭介は徐々に打ち解けていった。陽子が盛んに圭介に話しかけ、チームの中に解け込ませようとしているのが圭介にも解った。しかし、圭介の心を解いていったのはそんなことではなかった。肉体を動かし続けることによって精神の枷は緩められていくものだ。汗をかくにつれ、大声を出すたびに、そして息が荒くなってくるほどに、圭介の頭の中の彩りは単純になっていった。庶務チームを勝たせようと自分の肉体を駆使することだけが頭の中に残っているのだった。

そんな中に身を置くのは実に心地よいものだ。圭介は居心地のよい落ち着き場所に流されて行く自分に気付いていたが、それに抵抗しようとはしなかった。

競技が全部終わったのは正午を少し過ぎた頃であった。食堂で食事をしながら表彰式を行います、というハンドマイクの声に促されて、従業員たちは表通りのほうへぞろぞろと歩いて行った。三叉路でハウスの方を窺った圭介は、業者たちの車がないのに気付いた。休日には弁当の給食がないため、工事屋たちは昼食をとりて外出しているのだ。

缶ビールと折詰弁当の昼食をとりながらの表彰式はにぎやかだった。チーム賞、個人賞の他にユーモラスな賞が設定されていて、工場長がそんな表彰状を読み上げると、囃し立てるヤジと笑いが湧き上がった。女たちもほとんどビールを手にしていて。ジュースを飲んでいるのは子供たちだけのようだった。

食堂のにぎわいの中で圭介は“本来の圭介”に戻った。肉体を動かすことを止めた圭介の精神は再び活発に動き始め、複雑な彩りが頭の中によみがえってきていた。食事を終えた圭介は集いを辞するつもりで、入り口の柱に寄りかかっている秋山のところへ歩いて行った。秋山は缶ジュースを手にしていて。

「おや、秋山さん、ビール飲まんのですか」

「ちょっと・・・・・・理由がありましてね・・・・・・」

「身体でも悪いんですか・・・・・・」

「ええまあ・・・・・・大したことはないんですがね」

招待の札を言って出て行こうとする圭介を秋山は呼び止めた。

「今日は真藤さんも結構楽しんでおられたようですね。皆さんにもビール持って
いってやってください」

そう言って秋山は薄い唇の間に歯を見せて笑った。

工事屋たちは未だ戻っていなかった。もらってきた半ダースの缶ビールをテーブルの上に置くと、圭介はグラウンドの方へ歩いて行った。日が高くなるにつれて草むらの露は消えていたらしく、圭介の足元で乾いた枯草のたてる音が快かった。

気持ちの良さそうな所を選んで圭介は枯草の上に寝ころがった。柔らかい空の色が圭介の目に映った。目を閉じて、両手を頭の下に入れると、食堂のざわめきが遠ざかるようであった。今朝ここに佇んだ時の寂しさが再び圭介を襲っていた。身体全体から力が抜けていくような気持ちを味わいながら、以前にも同じようなことがあったなあと圭介は思った。

杉林と雑木林の間を切り開いた所に工場はある。柔らかに澄んだ空からは暖かい光が降り注ぎ、木々の梢は優しく揺れて工場の人々を見下ろしている。人々の声は楽しげに響き、その表情は生活の喜びに溢れている。暖かい言葉が交わされ、友情と連帯の輪の中で人々の心は通い合う。そんな画像が圭介の頭の中で何枚も重ねられていった。

重なり合いながら徐々に鮮明になってくる一つの像は、この工場の姿であった。

そうだ、俺たち工事屋が来るまではこの工場はきっとそんな所だったんだ。

そう思った圭介の頭に一つの言葉がふっと浮かんだ。

「ニュー・ラナーク」

圭介は小さく呟いた。

その言葉の意味を圭介はすぐに悟った。圭介にとっての理想郷はユートピアでもエデンの園でもなかった。ロバート・オーウェンが経営したと伝えられるニュー・ラナークの工場の像が頭の中で勝手に組み立てられ、圭介にとっての理想郷の位置を占めているのだった。

すると、俺たち工事屋は一体何者なんだろう・・・・・・一体・・・・・・何者なんだろう・・・・・・。

柔らかい光と枯草の乾いた匂いの中で圭介はまどろんでいた。短い時間であったが

枯草の中に結ぶ夢は多彩であった。子供の頃百科事典で眺めたユートピアやエデンの園の絵が次から次へと現れては消えた。

イヴの顔をじっと見つめると、その顔が武藤陽子の顔になった。圭介が声をかけようとする、エデンの園はたちまち消え去り、ユートピアが現れた。緑の草原に佇む黒衣の男が高木の顔をしているのに気づいて呼びかけようとする、ユートピアも消えた。

次に現れたのは何処かの工場らしい建物の内部であった。天井に採光窓が大きく切っており、内部は明るかった。それでも建物の中には暗い一角があった。その闇の中から人の声が聞こえていた。暗い一角がだんだん広がって、人の声が近づいた。目の前に迫る闇の中の声が秋山の声だと思った時、圭介はふっと目覚めた。眩しそうに目を細めて起き上がる圭介の傍に秋山が立っていた。

「ビールがまわりましたか。枯草の中は気持ちよさそうやけど、風邪でもひいたらたいへんや思うて呼んだんですわ・・・・・・・・」
「いやあ・・・・・・・・すんまへん、どうも」

秋山は社宅へ戻る途中であった。秋山と別れてハウスに向かいながら、圭介は今の夢を繰り返し思い返していた。